



第95号・2004(平成16)年4月

対談

『石橋湛山の戦後』をめぐって 姜 克實／増田 弘
——小日本主義は政策・行動としてどう現実化されたか

エッセイ

アメリカを非アメリカ的視点でみれば 浜 短子
若い人を「教育」する 石橋 省三

論文

幻と希望の轍
——石橋湛山と矢内原忠雄における平和思想の比較考察(下)

論壇季評

派兵論じる前にアラブ理解を／／アメリカ帝国の
衰退の始まり／／昭和史に学ばぬ小泉言行録／
“国論二分する”言葉遊びの危うさ／／イタク便
乗のどさくさ改憲論／／白紙から新憲法」の安
倍提案／／小泉構造改革で「復活への序曲」？／
稻葉『経済学』は構造改革有害説／／エコノミス
ト不信がベストセラー生む皮肉

ます。夕刻に行けば、そこには正に上司と若手のコミュニケーションの場と化しています。私のいた外資の幹部による電話会議で、「あの若手はもう一つ伸び悩んでいるので、今晩飲みに連れ出して会話をする」という報告が、日常茶飯事の様になりました。

場を変えて、議論がしやすい雰囲気を作り出す必要性は、今と昔、洋の東西で変わりません。今もって、私が香港とロンドンに勤務した時の現地人々ツツからメールや手紙が来ます。「この様に昇進した」、「こんなことをやり始めた」などの報告です。そして、この様な連絡を寄こすのは、当時酒場で私に長々と議論を吹き掛けていた連中ばかりです。

「魚に泳ぎ方を教える」

この表題は、東京大学名誉教授・宇沢弘文先生の著書『経済学と人間の心』の中 있습니다。子どもに数学を

教える時に必要なのは、子ども達が生まれながらに持っている数学を理解する能力と性向がすぐくすく育つ環境を、用意することだと述べられています。

日本人が生まれながらにして持っている能力と性向、つまり、自然と共生する能力、他人を敬う性向、科学精神などが、すぐくすく育つ教育環境作りが、今一番必要といえます。言い換えれば、教育の場としての大学や教育機関が求められている訳です。

私も、長い間、研究所で勤務し、優れた研究者が必ずしも優れた管理者・経営者でないことを知らされました（もちろん両方に長ける人も多く存在します）。これからは、研究とは別に、「教育」ができる人材を大学や教育機関に意図的に配し、若い人達の持つ可能性を積極的に引き出すことが急務といえます。

前述の通り、経済がグローバル化す

ればするほど、それを巧みに担える主体は、中央集権的な国家ではなく、地域や企業に移行していきます。それらを支える種々の能力を持った責任ある個人を育て、そして輩出することを、大学や教育機関は早急に実現しなければならないでしょう。

日本が、地域と企業経済にしっかりと軸足を置き、次の時代に向かって新たな軌道を描き始めるために残された時間は、そう長くありません。昨今話題となっている教育基本法改正の論議を待つことなく、心ある方々に、今こそ、「教育者」として立ち上っていただきたいと強く思います。

私事で恐縮ですが、四月から名古屋商科大学の教授を拝命します。若い人と酒を酌み交わすのを楽しみにしています。そして、目線が高い、輝きながら仕事する若者を、少しでも増やしたいと思っています。

幻と希望の轍

——石橋湛山と矢内原忠雄における平和思想の比較考察（下）——

井坂 康志
いさか やすし

三 日蓮と預言者精神

◆日蓮主義とキリスト教

石橋湛山と矢内原忠雄という同時代人の平和思想に着目し、戦中・戦後における抵抗活動を概観したうえで、両者のキリスト教的基礎を確認してきた。ともに一般的な思想潮流からはアウトサイダーであり、仰ぎ見られた幻の同質性が仮定された。この幻の形成を可能としたのが、宗教的信念を通じて堅持された理想、大志であった。

石橋、矢内原はともに戦前・戦後という原理を異にする世界を生きた。いわば「一つの時代」を生きた人物である。この事実から両者の思想・行動様式の比較検討は次の方法で行われた。すなわち、①思想形成、②宗教における特質、という両者の精神的諸前提を抽出し、③戦前・戦中の言動、④戦後の展望への連續性が明らかにされたのである。彼等の基

礎的信条が言動を通じて外部圧力にどう反応したかを見ることで、高度の精神的一貫性が保持される事実、すなわち「幻の同質性」が見出された。

本論（上）で基礎的視角は示すことができたと考える。以下では異なる角度、すなわち戦前・戦中の日蓮主義にもとづく両者の国家観を中心に見ていただきたい。

田村芳朗・宮崎英修編『日本近代と日蓮主義』では、日蓮の国家観が戸頃重基によりきわめてリベラルに評価されている。基底には日蓮の国家観が本来的に国体絶対主義と一線を画するという認識がある。事実、日蓮自身の国家観は、明治国家の据えた人工的な天皇制とは相容れなかつた。傍証に、天皇制アシズムが跋扈した昭和一〇年代には日蓮遺文の隨所に不敬罪が言い渡され、削除を強制された事実がある。國家主義の狂氣に対して、良心的な日蓮主義は精神的不服従という姿勢を必然的に有するところとなつた。

日蓮の国家觀は「我れ日本の眼目とならむ。我れ日本の大船とならむ」(『開目抄』)といつ救世主的意識、すなわち世の道徳的墮落を断罪し、善の到来を希望する預言者の精神に貫かれる。重要なのは、日蓮がすでに「日本」を意識して自らの大志を築いた点にある。すでに日本国を明確な射程に据え、未来に対する透徹した洞察力、構想力を示したのである。

同書では、日蓮主義の精神は自由主義的キリスト者の反國家主義的性格に通じるとの指摘がなされる。例えば、日蓮思想の非国家的構想力に気づいた先覚者として内村鑑三、矢内原忠雄、本下尚江らを取り上げる。

では、当時の日蓮主義とキリスト教に通じる中核的精神とは何であったか。戸頭は矢内原の「國家の理想」を引用しつつ、「基督者でありながら、なおよく日蓮を尊敬しきた理由も、日蓮に見られるこのよくなき国家を高くこえる正法為本の主張に深く共感を覚えたからにはかならない」という。彼等がキリスト教信仰を核としつつ同時に日蓮思想にも深い造詣を示し得た理由を、的確な真理と國家の関係性理解に求めるのである。國家が真理を肯定するのではない、真理が国家を創造するという信念——石橋、矢内原の一生を懸けた主張——に大いに通じる。卓見であろう。「理想があつて初めて國家は存立し得る、そして理想を失った国家は滅亡する」という矢内原の発言も、ここで明快な論理的一貫性を持つのである。真理を主体的に受けとめその時代にふさわしい言葉である。

嫌いである。……然からばこれを何うしたら善いか。唯一の途は功利一点張りで行くことである。我れの利益を根本として一切を思慮し、計画することである。我れの利益を根本すれば、自然対手の利益も圖らねばならぬことになる。対手の感情も尊重せねばならぬことになる。……吾輩は敢えて我が国民に云う。我等は曖昧の道德家であつてはならぬ。徹底した功利主義者でなければならぬ。然る時に茲に初めて眞の親善が外国とともに生じ、我の利益は其の中に图らるる

石橋は「曖昧の道德家」を批判し、徹底した功利主義者であれと説く。世の曖昧の道德家とは、相対的かつ主観的な善を掲げ、浅薄な自己満足で他者を断罪するのみである。価値を支える原理が脆弱であり、状況の変化に容易に流される。一貫性を持たない。しかし、石橋には明確な価値基準がある。それは利益である。利益とは、日常生活の判断指針のみならず、普遍的道德原理をも意味する。この原理は個人間のみならず、国家間にまで延長された。

石橋の功利主義理解は確かである。英國の功利主義者J.S.ミルは究極の行動原理をキリストの福音に見出すが、石橋も「徹底した」功利主義の原理を愛他精神に置く。このような高度の実践哲学は、キリスト教、日蓮主義を矛盾なく精神世界の中核部に位置付けることを可能とした。石橋が他の有益な思想を旺盛に精神的滋養とできたのもこのためであり、石橋の宗教理解全般に見られる傾向でもある。

述べる預言者精神こそが、キリスト教と日蓮主義の共通基盤といえるのかもしれない。

右の認識をもとに、日蓮の国家觀を手がかりとして石橋と矢内原の日蓮理解の比較検討を試みたい。

◆「日本の柱」となる大志

石橋が日蓮主義を生育環境、人格形成過程においてきわめて濃厚に受容したことはよく知られる。石橋の日蓮觀はすでに多くの研究が取り上げるところでもある。石橋の宗教的基礎を理解するにあたって特に重要なのは、現世的価値を優先するアラグマティズムの貫徹であろう。いわば「人生中心」の世界觀であつて、彼の内部に培われた大志は終始現実問題の討究に向けられ、常に実践的露露をたどつた。石橋の師・田中王堂は「役に立つならば君の信条は真理である」という実践哲学を説いたが、石橋においても同様の哲理は十分に機能し得た。

石橋の実践道德は人類社会の幸福にまで及ぶ。これは石橋の平和思想にも顕著に見られる傾向である。石橋にとって「理想社会の実現」ほど、現実的な人生目標はなかつたのであろう。

石橋の実践的理想的追求はすでに初期の発言(「先ず功利主義者たれ」)に遺憾なく表れている。

「吾輩は所謂人道なる言葉は嫌いである。恩恵なる言葉は

石橋の柔軟な精神性は国家的枠組みの現実的理解をも可能とした。石橋は國体について次のようにいう。

「國体は出来上った結果であつて、始めて崇高無二の國体があるのであつて、此の國体が此國民を作り出すのではない。……故に今國体と道徳、國体と真理との關係は、何うであるかと吟味して見れば、取りも直さず、國体は道徳に産み出される者であつて、道徳を産む者ではない。真理が國体を生み出すのであつて、國体が真理を生み出すのではない」

「溢りに國体を口にすべからず」と題する本論に鮮明なのは、真理が第一義として存在し、この基盤上に國家が成立する構図であろう。國家それ自身が目的ではなく、真理の基盤により結果として國家が成立するという見解は秀逸である。石橋にあつては、國家や國体とは日々のたゆみない理想追求の結果創り出されるのであつて、日々その検証を経て内実を確かにするものであつた。したがつて、國体の安易な宣揚は國家の本質理解に有害であった。國家とは個々人に宿る真理を表象し得てこそ機能するものであり、その逆ではないためである。

成立基盤たる真理が内部崩壊し、國家ないし國体と称せられるものだけ残つても無意味なのは当然である。身体ばかり肥つて、魂の痩せた人間に価値がないのと同様である。裏返せば、真理や理想がない国家は存続するに値しない、という鮮烈な問題意識をも読み取ることができる。矢内原は「國家

の理想』において、真理を基礎としなければ、国家は单なる物質的存在に過ぎず存在意義を失うと喝破する。石橋と通底する論理であろう。

では、石橋の念じた理想とはどのようなものであったか。石橋はしばしば自らの心構えを周囲に語り、人生觀、究極の目標を明らかにした。石橋が好んで用いた日蓮の言葉を引用しておこう。

「自分は日本の柱となろう、自分は日本の眼になろう、自分は日本の大好きな船になろう、こう自分の立てた願は断じて破らない」

「柱」とは言論活動の根源、あるいは理念、大志と言い換えてよい。大志こそが強力な原動力である。エレミヤやイザヤを見るように、大国をも動かす、燃え上がる志が預言者の条件である。同時に、石橋の大志は彼の内部のみにとどまらず、東洋経済の一部社員にも希望の要石として分け与えられた。石橋とともに戦争末期横手に疎開し、戦後出版局長、後に専修大学教授の梅井義雄はいう。

「戦時中、自爆を決意してまで軍部に屈服しなかつた石橋さんのバックボーンについては、私はこう考える。それは、『我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん』という信念である。これは日蓮の『開目抄』にある言葉で、私たち東洋経済の社員は、在職中に何度か、石橋さんの口から聞いたものである」

一つ名前を付けて、東洋山経寺と申したらどうか、などと言うた事も御座います

石橋は東洋経済の基本精神を、「唯だ一意奉公のために言論するのであって、私の利益のために、一毫と雖も動かされていまい」と置くが、これは寺や学校などの公共物を連想させる。石橋は禅寺主義、すなわち社会に対する使命感の共有こそが東洋経済を支えると信じた。組織を私物化する発想など当時はなかつたといつてよい。同様の論理から、使命が果たせなければ「自爆して滅びた方がはるかに世のためになる」。透徹した一貫性には一驚を禁じ得ない。

石橋の志と東洋経済の公共性が戦争末期にさまざまな同志を呼び寄せ、彼等の複合的交流を可能とした。同時に新たな時代の息吹をも生んだのである。他の大言論機関が権力に押し流され、木釋としての機能を著しく低下させるなかにあって、東洋経済は「地の壙、世の光」として、多くの言論人の良心を代弁した。いわば、言説空間における公共圏が辛うじて成立したのである。

◆預言者の自覚

前出『日本近代と日蓮主義』では、キリスト者の日蓮理解も詳しく取り上げられる。同書では特に内村鑑三、矢内原忠雄、木下尚江を日蓮の深い理解者の系譜として描く。同様に彼等を国家主義に屈しない反骨の実践家としても捉える。以

梅井は、少年時代の石橋がこの言葉を筆写して卒業する級友のはなむけとした事實を述べ、「改めて石橋の精神的由来を見直した」という。

石橋は大志実現に向けて、有能な組織者としても独自の藝術を開いた。東洋経済という場を活用して、志と同じくする言論人を周囲に積極的に取り込んでいく。石橋が入社する以前から、東洋経済では社業と勉強会、研究会が不即不離の関係にあつたことが『社史』に記されている。石橋は東洋経済の伝統を拡充し、時代の節目に多くの研究会、対談企画することで外部の同志と連携をはかつた。特に自由主義的言論人（清沢渕ら）は、言論抑圧の強化にともない急速に発言の場を失いつつあつた。彼等に発言の場を提供したのが石橋率いる東洋経済であつた。良心的言論の灯を点し続けたのである。この時期、東洋経済は駆け込み寺としての機能をも有していたことになる。

石橋の個性と同様、「場」としての東洋経済の独自性も特筆されるべきである。本来、東洋経済は共有主義と同人主義を基礎とした。『社史』には石橋のユニークな見解が紹介される。

「我々は所謂お寺主義で、自らの力の許す限り、縁の下の力持ちでもよい、何等か国家のため、社会のためになる仕事を致したい、と言ふ念願から聊か努力致してをる次第であります」「町田さんは禅寺主義とはれましたが、私は之に

下では、キリスト者・矢内原忠雄の日蓮理解および国家觀を確認したい。

矢内原の師・内村鑑三の主著『代表的日本人』では、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹と並び、日蓮が取り上げられた。本書に見る内村の精神は『独逸語版序文』に象徴的である。

「余は、基督教外國宣教師より、宗教なりやを学ばなかつた。すでに、日蓮、法然、蓮如、其他敬愛なる尊敬すべき人が、余の先輩と余とに宗教の本質を示したのである」

内村は宗教的本質を体得した先覚者として日蓮を筆頭にあげる。「眞の意味に於ての宗教的迫害は、日本に於ては、日蓮を以て始まつた」とし、近代日本のキリスト教が時代精神において日蓮の純然たる後裔との事実を指摘する。内村自身、自らの苦難の歩みを日蓮の生涯に比していだす。

日蓮から多くを学んだのは矢内原も同様である。前出『日本近代と日蓮主義』では、矢内原の日蓮理解の卓越性に注目し、社会学者・実践家としての良心に最大級の賛辞を呈する。矢内原の日蓮理解と学問的合理主義を結びつける視角は秀抜といえよう。経済学者の現実的な日蓮理解は内村をも上回る。

「（矢内原の）遺文の箇所と引用とは、キリスト者の日蓮論のなかでも抜群である。その理由の一つに、経済学者矢内原の研究者としての実証主義の表出を見るのである」「それに

しても、矢内原は内村の日蓮觀をそのまま継承してはいない。
……内村の日蓮觀における矛盾は矢内原にはない。むしろその日蓮觀はいつそう深まつてゐる

矢内原においては、合理的な経済学的養成も武器として機能し得た。理想追求の過程で現実経済を丹念に觀察しその矛盾を明らかとするのが彼の基本姿勢である。社会科学者の徹底した価値追求の態度は、常時理想実現への強烈な大志によつて支えられた。

矢内原の理想は『余の尊敬する人物』の日蓮理解からも窺い知られる。矢内原の日蓮像は、「真理のために真理を愛し、真理によつて國を愛し、真理の敵に向つて強く『否（ノオ）』と言ふことの出来た人」という一文に集約される。日蓮が日本人であつたことを喜び、自らの「歎め」として見出している。

矢内原は道破する。³⁶

「法即ち真理は國よりも、師よりも、親よりも高くあります。日蓮の血には烈々たる愛國心が燃えていました。それには一点の疑いもありません。併し日蓮は國を法によつて愛したものであつて、法を國によつて愛したのではありません。國は法によつて立つべきであつて、法は國によつて立つのではありません」

國家を国家たらしめるのは真理であり、断じて逆ではない。矢内原の魄氣迫る眞悟の表明である。愛國心とは國家を通じ

の柱であつて、私を倒すものは日本國を倒すものであるといふ自覚である。……日蓮上人が、「日蓮は聖人にあらざれども法華經を説く如く受持すれば聖人の如し」。又「我身はいかにひなき凡夫なれども、御經を持ちまいらせ候分者は、当世には日本第一の大なりと申すなり」。といつたと同じ自覚を、聖書を持つ者としての私は感ずるのである³⁷。

注意すべきは、自覚としてキリストの福音と日蓮の精神を同時に掲げた点にある。両者は相反するように見える。しかし、矢内原の福音は、日蓮の法華經と並列關係にある点を見逃すべきではない。日蓮の超人的強さは、度重なる艱難によつて一段と高められたが、常に法華經の真理が彼を根源的に支えた。法華經によつて日蓮は自らの心を強め、「國の柱」として立つことができたのである。

矢内原にあつては福音と預言者精神が左右の腕として彼を支えた。艱難は彼の敵ではなかつた。信念はいつそう強まり、搖るぎない希望の原理に転換された。試練は喜びの糧となつたのである。矢内原は知つていた。「艱難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生み出す」ことを。そして、希望が失望に終わることはなかつた。

矢内原の渾沌な精神の根源、真理に徹して譲らない姿勢がいかなるものであつたか。平和思想の求心力ともなる矢内原の自覚は、次のようにも表現される。

「信仰によつて惡はにくみ、善はしたしみつつ權力に服従

て真理が實現されたときに正当化される。しかし、真理を失えば、道徳的腐敗を斬罪し葬り去ることこそが眞の愛國心である。特に國家觀について彼の預言者精神が明瞭に表れてゐるといえる。事實、矢内原は戦時下抵抗において、生命を賭して「真理による國家」を訴え続けた。ここに精神の中核を見出すことができよう。

矢内原が撃り所としたのはキリスト教のみではなかつた。補完原理として「國の柱」の氣概をも有した。彼が「神の國」講演で叫んだ「此の國を葬つて下さい」に加え、日本基督教団代々木教会における矢内原の発言（一九四二年五月二十四日）が特に注目に値する。このとき、通常の参加者の一〇倍程度の聴衆が教堂を埋め尽くしたという。戦中の抑圧下にあって、義に飢え乾く人々が矢内原の信念を熱烈に支持したのである。極限状態で聽することなく所信を語る矢内原は多くのキリスト者の希望であった。彼は「地の塙、世の光」としてのみならず、「日本國の柱」としても講壇に立つた。

要旨は、矢内原の明白な二つの自覚に関わる。一つは罪人の自覚、もう一つは日本國の柱としての自覚である。いうまでもなく後者は、預言者・日蓮の自覚と同源である。

「私には明確な二つの自覚がある。一つは、私は罪人であつてキリストの十字架の下に立たねば生きていけない人間であるといふことである。……それにも拘わらず私は之と全く相反したやうな、も一つの自覚がある。それは私は日本國

する時、始めてその服従は偽善的とならず、自由なる、義しき、良心的な服従となるのであります。之によつて我々は一方に於いて國家の腐敗の場合之を責める預言者であると共に、他方に於いて常に國家の権力に対する良心的服従者たり得るのです。否、國家権力が神より出でたものであることを知つて之を重んずればこそ、それが濫用される時預言者は黙さないのである³⁸」

矢内原における服従とは良心にもとづく自由であつた。それゆえ権力が腐敗し濫用されるときには、大胆な宣戰布告を躊躇しなかつた。「良心」とは、神の命令による善への奉仕を指すが、矢内原にあつては同時に「國の柱」としての不屈の大志をも意味する。これによつて、矢内原は自らが被る不正を、翻つて希望の根柢としたのである。

結語——希望の井戸を掘るということ

石橋湛山、矢内原忠雄が同時代に有した精神的基調を平和思想を通して考察してきた。石橋、矢内原は当時最もアクチニアルに時代の変転を生きた人物であつた。彼等の個人史は戦時下抵抗の象徴といえるかもしれない。

彼等は戦前・戦中の抑圧下で自らの幻を仰ぎ続けた。彼等に真剣に耳を傾ける人は少数だつた。多くは輕蔑もしくは無視した。日本は運命に翻弄され、無惨な敗戦を迎えた。彼等アウトサイダーこそが日本の良心であつた。

石橋、矢内原は井戸を掘つた。信念にもとづき、同時代に井戸を掘つた。愚直に井戸を掘り、掘り進めていた。ついで水が出たことはなかつた。周囲はあざけつた。二つの井戸が奥深くてつながる運命にあることは、当人たちさえ知らなかつた。戦後、奔流のように、井戸から水が溢れ出した。「公義をほとぼしする水のように、正義を尽きない川のように流れさせよ」、預言者の言葉が成就した。彼等の井戸から戦後といふ新たな泉がとめどなく溢れていつた。

敗戦後六〇年、彼等の絶対平和主義を逆照射すれば、今なお褪せない希望の光を認めざるを得ない。新憲法は明確に非戦を謳う。国際社会の常識からすれば、異端かもしだれない。しかし、今痛切に認識されるべきは、日本人のなかにも異端を恥じることなく眞の平和を希求した人物が存在したこと、そして今ある現実は少數の良心が拓いた水路に連なる事実ではないだろうか。

思想家・加藤典洋は永遠平和を展望したカントの認識論について次のように述べるが、現代人への鋭い問いかけといえるだろう。⁴⁵

「何とかを一心に考えることの中に、現実的な観点から見たら理想的な、現実離れしたもののがすでにあってゐるのです。何とかを現実的に考えるといふことが、理想的なものにむしろ支えられているのです。ですから、そのことを忘れずに、理念的なもの、理想的なもの——これを超越的なもの

といつてよいでしょう——に、しっかりと場所をとつておくべきだ、その権利を認めることが大切だ……」

先覚者から学ぶべきことは多い。時代転換の現代にあって最も求められるのは、歴史的想像力を働かせ、新たな希望の原理を構築することである。小欲を棄て大欲に就く勇気、そして新たな井戸を掘る気概が必要であろう。

【翻譯】本論執筆に際し、さまざまのご教導を賜つた石橋湛山記念財團の方々、および東洋経済新報社OBの金森東一郎氏、山口正氏、篠原真氏に対し、衷心よりお礼申し上げたい。浅学ゆえの誤りも多々あると思う。ご叱正を賜れば幸いである。

【注】

- (40) 田村芳朗・宮崎英修編『日本近代と日蓮主義』(『日蓮講座 四』)春秋社、一九七一年、第一章一節。
- (41) 前掲『日本近代と日蓮主義』参照。
- (42) 前掲『石橋湛山の思想史的研究』第三章を参照。
- (43) 前掲『石橋湛山の思想史的研究』一四四〇一四五頁。
- (44) 前掲『石橋湛山の思想史的研究』一一頁。美は次のように指摘する。「事實上、湛山の目指していたのは、『万人に等しく生活の保障を与うる』理想社会の実現であり、彼には、具体的階級の利益以上に、人類の社会生活の幸福という至上の理想、不変の価値規範があつた。」
- (45) 前掲『石橋湛山全集』(第一巻)、四〇五—四〇七頁。
- (46) J·S·ミル『功利主義論』(『世界の名著49』)中央公論

頁。

- (47) 前掲『石橋湛山全集』(第一巻)六五頁。
- (48) 『石橋湛山全集』(第一二巻)東洋経済新報社、一九七一年、五六九頁。一九四二年に創立四八周年記念講話として社員総会で語られたものである。
- (49) 長幸男編『石橋湛山——人と思想』東洋経済新報社、一九七四年、一一九頁。
- (50) 『東洋経済新報社百年史』東洋経済新報社、一九九六年、一七〇頁。
- (51) 石橋が組織した研究会は軍備縮小同志会(一九二一年)、金融制度研究会(一九二七年)などが代表的であるが、総数はかなりの数に上ると見られる。
- (52) 前掲『東洋経済新報社百年史』一六六—一六七頁。
- (53) 内村鑑三／鈴木俊郎訳『代表的日本人』岩波文庫、一九四一年、一一頁。
- (54) 前掲『日本近代と日蓮主義』一八三頁。
- (55) 前掲『日本近代と日蓮主義』一八六頁。
- (56) 前掲『余の尊敬する人物』一〇五頁。
- (57) 矢内原忠雄全集(第一七巻)岩波文庫、一九六四年、一六九—一七〇頁。
- (58) ロマ書『第五章一五節』。
- (59) 富田光雄『權威と服従』新教出版社、一〇〇三年、一三八